

「言語活動の充実」を図る学習指導の在り方（第二年次）

—研究協力校における実践的な取組みを通して—

調査研究チーム

I 研究の趣旨

新学習指導要領において、「言語活動の充実」は各教科等を貫く改善の視点となっている。そこで本教育センター（以下、教育センター）では、昨年度より本テーマの研究に取り組み、「言語活動の充実」と学力の向上との関連性を明らかにしたり、「言語活動の充実」を図るための手立てを提案したりするなどの成果を上げてきた。また、福島県教育委員会と協力して『「言語活動の充実」実践事例集』を発行し、各教科ごとに1単位時間内における言語活動の実践事例を紹介することもできた。

そこで、新学習指導要領の完全実施を翌年・翌々年（小学校：平成23年度、中学校：平成24年度）に控えた今年度は、研究協力校14校と連携し、「1単位時間内での言語活動の工夫」から「日々の授業の中での意識的な取組み」に視点を移して研究を進めることで、「言語活動の充実の日常化」を図る上で必要な授業の要素や手立て等を明らかにしたいと考えた。そして、本研究から得られた様々な知見を広く県内の教師に普及し、各学校の実践に生かすことができるようにすることで、児童生徒の思考力・判断力・表現力等の育成に寄与したいと考えた。

II 研究の概要

1 研究内容・方法

(1) 研究協力校における授業実践を通して、「言語活動の充実」を図る上で必要な授業の要素や視点、手立て等を明らかにし、具体化・一般化を図る。

① 事前訪問による趣旨説明

研究協力校を事前に訪問し、本研究の趣旨や授業実践にあたって配慮すべき内容等を説明する。

② 提供授業の事前検討会の実施

本研究の趣旨に沿った提供授業となるよう、授業者とセンター指導主事との間で学習指導案の事

前検討会をテレビ会議や電話、メール等で行う。また、指導計画や指導過程への言語活動の位置付け、具体的な手立て、求める子どもの姿（評価規準）等が明記された指導案の形式を提示する。

③ 情報提供及び交換

各校の代表者による情報交換会の場を設定することで、各校の実践の成果や課題を共有できるようにする。また、そのことを通して、各協力校の授業実践が充実したものとなるようにする。

④ 提供授業の検証

言語活動によって、児童生徒が活発に思考力・判断力・表現力等を働かせた場面を精査し、有効な教師の働きかけや手立てを明らかにする。

(2) 「言語活動の充実」にかかわる意識・実態調査を研究協力校の教師・児童生徒に実施し、意識や実態等の変容をとらえることで、有効な手立てを見いだす。

2 研究協力校

本研究の実践にあたっては、7域内の教育事務所より推薦された小・中学校各7校、計14校を研究協力校とした。全域内での実践を行うことによって、本研究の県内への普及を図りたいと考えた。

III 研究の実際

研究協力校と教育センターとの情報交換、並びに研究協力校における実践等から見いだされたことを中心に、研究の実際について述べる。

1 「言語活動の充実」を図る上で必要な授業の要素や視点、手立ての明確化、具体化・一般化

(1) 事前訪問による趣旨説明

授業実践並びに各校での校内研修が本格的に始まる前（5月～6月初頭）にすべての研究協力校の訪問を行った。本研究の意義を理解いただくために、次のような趣旨説明を行った。

○ 「言語活動の充実」の目的

「言語活動の充実」のねらいは、児童生徒の思考力・判断力・表現力等の育成にある。OECD生徒の学習到達度調査（PISA）、全国学力・学習状況調査等の結果から明らかになったように、その育成が疎かになっていたという反省に、まず立たなければならない。

○ 「言語活動の充実」とは何か

言語活動の概念自体は、いたってシンプルである。文字通り「言語を駆使した活動」のことであり、「話す」「聞く」「書く」「読む」という子どもたちがこれまでも行ってきた行為である。しかし、今問われているのは、言語活動が「充実」しているかどうかである。例えば、教師が教材文の解釈を講義し、児童生徒が黙ってそれを「聞く」という授業があったとする。この時、確かに児童生徒は言語活動をしているが、「充実」しているとは残念ながら言えないだろう。そこで「言語活動の“充実”」とは、次のような状態であるにとらえ、その姿を希求した授業づくりを心がけたい。

児童生徒一人一人が思考力・判断力・表現力等を働かせていること

ポイントは、「一人一人」である。一部の児童生徒だけでなく、全員が思考し、判断し、表現する授業を行っていくことで、個々の力を高めたい。

○ 学習指導要領が改訂される意味

「言語活動の充実」を図るためのアプローチには、「単元全体を通しての取組み」「1単位時間に特化した取組み」なども考えられる。しかし、思考力・判断力・表現力等は、一朝一夕にははぐくまれるものではないことを考えると、日々の授業の充実、毎日の積み重ねこそが大切になってくる。その意味で今回の学習指導要領の改訂は、日々の授業の中に言語活動を適切に組み込み、児童生徒の思考力・判断力・表現力等をはぐくんでいくという「授業の改善」を意味していると言える。

(2) 提供授業の事前検討会の実施

学習指導案の事前検討会をテレビ会議や電話、メール等で行った。その中味は、「言語活動の充実」を図る授業の具体的なイメージを持ってない授業者の悩みや疑問点へ応えるものであったり、それまでに教育センター側が他校の授業を参観して見えてきた留意点などを伝えたりするものであった。

また、授業案の形式についても、「言語活動の充実」にかかわる点については特記するようにした(図1)。①言語活動の指導過程への位置付け、②本時の言語活動について、③求める子どもの姿(評価規準)を明記することで、授業者並びに参観者が、児童生徒が思考力・判断力・表現力等を働かせている姿を具体的にイメージできるようにしたいと考えたためである。

第○学年○組 国語科授業案(学習指導案) 日時・場所・指導者

1 単元名 2 単元設定の理由 3 単元の目標 ※ 4観点 4 指導計画 5 本時のねらい 6 本時の言語活動について (記述例) 自分で決めたテーマに沿って一人読みをするとき、常に文章に戻りながら読み、自分の考えをまとめるという活動を大切にしたい。また、書きとめた自分の考えを友だちと交流する際には、読書の楽しさを共有するという目的意識をもたせるようにしたい。 友だちと読みを交流した後は、交流を終えての自分について振り返る書く活動を取り入れるようにする。友だちと比較し、「友だちの考えを聞いて自分の考えが変わったこと、また深まったこと」を意識して振り返らせることで、自分の変化やよさを感じ取れるようにしたい。	各校の様式による 本時で大切にしたい言語活動について記述する。										
7 学習(指導)過程											
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%;">学習活動・内容</th> <th style="width: 50%;">指導上の留意点 ※ 評価(方法)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 本時のめあてをつかむ。 []</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>2 ○○について読み取る。 (1) 一人調べを行う。 (2) 友だちと話し合う。</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>3 話し合ったことをもとに、自分の考えをまとめる。</td> <td>※ 言語活動に関わる評価②</td> </tr> <tr> <td>4 本時の学習をふり返り、感じたことを国語日記にまとめる。</td> <td>※ 評価は別枠に記載し、学習(指導)過程には、上記のように記述するのみとする。</td> </tr> </tbody> </table>	学習活動・内容	指導上の留意点 ※ 評価(方法)	1 本時のめあてをつかむ。 []	○	2 ○○について読み取る。 (1) 一人調べを行う。 (2) 友だちと話し合う。	○	3 話し合ったことをもとに、自分の考えをまとめる。	※ 言語活動に関わる評価②	4 本時の学習をふり返り、感じたことを国語日記にまとめる。	※ 評価は別枠に記載し、学習(指導)過程には、上記のように記述するのみとする。	※ 言語活動にかかわる求める子どもの姿 [評価規準] 評価① 「××」にサイドラインを引き、そこから心情を想像して○○の意味について考えている。(ノート、発言) 評価② 友だちの考えを受け止めた上で、自分の考えをまとめている。(ノート)
学習活動・内容	指導上の留意点 ※ 評価(方法)										
1 本時のめあてをつかむ。 []	○										
2 ○○について読み取る。 (1) 一人調べを行う。 (2) 友だちと話し合う。	○										
3 話し合ったことをもとに、自分の考えをまとめる。	※ 言語活動に関わる評価②										
4 本時の学習をふり返り、感じたことを国語日記にまとめる。	※ 評価は別枠に記載し、学習(指導)過程には、上記のように記述するのみとする。										
(8 板書計画)											

図1 「言語活動の充実」を明確にした指導案の形式

(3) 情報提供及び交換

8月2日(月)に、教育センターにおいて「言語活動の充実」に関する研究協力校代表者協議会を開催し、「1学期中の主な取組み」や「指導上の問題点や改善策」などを話し合い、情報交換を行った。

(4) 提供授業の検証

～授業実践から見えてきた

「言語活動の充実」を支える重要な要素～

授業実践は全部で17回行われたが、「言語活動の充実」が図られた授業には、次の四つの要素があることが分かった。

- ① 言語活動が位置付けられた指導計画・単元計画
- ② 学びがいのある魅力的な学習課題
- ③ 教師によるコーディネート
- ④ 親和的な学級集団

① 言語活動が位置付けられた指導計画・単元計画

横浜国立大学教授の高木まさき氏は、「言語活動の充実とは、決して特別なことではなく、むしろ自然な言語活動を教室のなかに取り戻すことを通して、学習者の“考える力”の育成がめざされている、といってよい」（傍点は筆者加筆）と述べている。授業の中に言語活動を取り戻す。あえて「取り戻す」と表現されるほど、授業の中で言語活動が保障されていない現実が見えてくる。

教師は、児童生徒が考え、表現する時間と機会を保障する授業設計を、まず行いたい。日々の授業の中に「思考力・判断力・表現力等」が働く「話す」「聞く」「書く」「読む」という言語活動を適切に組み込むのである。教科によって授業展開・単元展開は違えども、PISA型読解力の育成の際に示された「受信→思考→発信」という考え方を授業や単元にしっかりと位置付け、意識的に取り組んでいくことが、すべての大前提となる（別紙【資料編 1】参照）。

しかし同時に、形式的に位置付ければよいというものでもないということが、実践授業の中から明らかとなっている。「学習意欲の喚起」「課題解決へのアプローチ」「一人一人の学習理解の定着」などは、教師による働きかけが欠かせないからである。この「言語活動の確かな位置付け」が効果的に働くために必要な要素を、次から述べていく。

② 学びがいのある魅力的な学習課題

児童生徒が主体的に言語活動に取り組む授業の最

大の共通点は、追究意欲を駆り立てる課題設定があることである。

例えば、研究協力校における中学校第3学年社会科の授業では、次のような学習課題が提示され、大変活発な言語活動が展開された。

株価は、なぜ変動するのだろうか。

この授業は、各自が選んだ企業の前日の株価を調べ、前時で調べたそれと比較させることで、株価は変動するものであることをとらえさせることから始まった。その後、ある企業の数か月間の株価変動をグラフ（株価チャート）で示し、問いを持たせた。子どもの課題意識を高めてからの課題提示は大変スムーズで、子どもたちも課題に対する自分の考えを付箋紙にどんどん書き出していった。そして、付箋紙を書き終わると、グループ内で付箋紙に書いたことを発表し合い、KJ法の手法を用いて具体事項の一般化を図っていった。

この授業で見られた子どもたちの姿から、「学びがいのある魅力的な学習課題」とは何かを考えることができる。一つは、自分の考えをまとめている時の姿からである。子どもたちは、一人一人が、これまでの学習から得た知識や情報、あるいは生活から得た知見を動員し、自分の考えを書き出している。この姿からは、本時の課題が、子どもにとって「考えたい」、あるいは考える「必要感」のある課題であったことが分かる。

もう一つは、友だちの話聞く態度・姿勢からである。この時の子どもたちは、本当によく友だちの考えに耳を傾けていた。形だけの聞き合いではない、心から友だちの考えを「知りたい」「聞きたい」という思いが感じられる聞き方であった。

なぜ、そのような聞き方になるのか——。それは、友だちが何を言うのが楽しみであるからにほかならない。自分とは違う考えや意見が出るから聞きたくなるのだ。するとこの時、それに誘発されるように、子どもたちは自分の考えも言いたくなっていく。考えが多様であることは、話し合う必然性をも生み出していくのである。多様な考えが生み出される課

題であることの大切さが見えてくる。

児童生徒の「解決したい」「調べたい」「なんとかしたい」という思いを高め、児童生徒が「聞きたくなる」「伝えたくなる」学習課題（換言すれば、話し合う必要感を生む、多様な意見や考えが導き出される学習課題）を教師が用意することを心がけたい（別紙【資料編 2・3】参照）。

③ 教師によるコーディネート

【国語】一人調べ→話し合い→まとめ
【社会】予想→調べ学習→話し合い→まとめ
【算数・数学】自力解決→練り上げ→まとめ
【理科】予想→観察・実験→考察→まとめ

「個人→集団→個人」という形態を基軸にし、上記のように授業展開を形式化させることは、どのような授業者でもある一定の水準を維持した授業展開ができるという点で有効である。おおよそこの枠組みの中で授業を展開していけば、授業としての体をなし、収まりもつきやすい。しかし、それだけでは、授業として十分とは言えないことも見えてきた。

ア 考えや意見の共有

「個人→集団→個人」というプロセスを踏む背景には、他者の思考や表現を受け止めさせることで、自己に反映させ、より多様な思考や表現をできるようにさせたいという教師の願いや意図が含まれている。であるならば教師は、集団思考あるいは交流の場で、適切な働きかけを行っていく必要がある。そこで出てくる様々な考えや意見、見方・考え方・感じ方を一人一人にしっかりととらえさせることにより、最終段階で、考えが確かになったり、磨かれたり、あるいは変容したりするからである。

そのためにも、友だちの言っていることを理解させたり、共有させたりするための「言語活動」が大切になってくる。表現されたことを一人一人に同じように言わせてみたり（再生活動）、簡単に言わせてみたり（要約活動）、あるいは別な例で言わせてみたり（換言活動）するなどの確認作業を適宜入れたり、その考えについて自分はどう考えるかをペアで語り合わせるなどの対話活動を入れたりするのである（別紙【資料編 4】参照）。

イ 的確な発問と練り上げによる高まり合い

「比較検討」を行う段階では、「話し合い」という活動が展開されることが多い。話し合いの様相を見たとき、それが「分かり合い」や「見つめ合い」などの相互理解をめざしているならば、いかにそれを共有させるかに腐心すればよいが、「高め合い」や「磨き合い」をめざすならば、ゆさぶりや焦点化などの教師による的確な発問と、子どもの考えを絡ませ合うコーディネートが必要となってくる。

授業には、教師が設定したその時間の「ねらい」がある。また、扱う教材には迫らせたい「価値」がある。だからこそ、ねらいや教材の価値に迫るような発言が出たときには、それについて考えを広げたり、どう思うかを問いかけたり投げかけたりするコーディネート（発言の促進、かかわり合いの促進）が必要となる。また、時には、ねらいに近づけたり、その教材の価値に迫らせたりするための発問を、話し合いの展開を見ながら行っていくことも必要となってくる。授業における個人の高まりは、授業のねらいや教材の価値に根ざしたものでなければいけないからである（別紙【資料編 5】参照）。

④ 親和的な学級集団

「授業の基本は、学級経営である」とよく言われる。互いの存在を認め合い、助け合うような仲のよい学級集団であると、充実した授業が行われることが多いからである。

「言語活動の充実」が図られた授業が行われている学級には、このような親和性があることも注目される。伸び伸びと、そして生き生きと自分の考えや意見を表出できる環境、間違っても笑われたり冷やかされたりしない安心した環境が、子どもたちの思考力や表現力をはぐくむ基盤となっているのである。

学校生活の満足度を測る尺度に、「承認」因子（自分の存在や行動が、級友や教師から承認されていると感じる程度）・「被侵害」因子（不適応感を持っていたり、いじめ・冷やかしなどを受けていたりすると感じる程度）という考え方があがるが、前者を増やし、後者を減らすための働きかけを教師が行っていくことも、「言語活動の充実」を視野に入れた授業づくりでは欠かすことができない要素の一つとなる。

授業の中で、発言を認められたり称賛されたりする機会があることや、諸活動の中で活躍する場面があることなどが児童生徒の「承認」感を高めていく。また、間違っただけの発言をしたときなどに、笑われたり、冷やかされたりすることがないようにする教師の対応が、児童生徒の「被侵害」感を低下させていく。

一見「言語活動の充実」には関係がないように思えることではあるが、このような児童生徒一人一人を大切にしたい教師の対応こそが、子どもにとっての安心した言語環境をつくり出すことになることを忘れてはならない（別紙「資料編 6」参照）。

(5) その他授業改善の視点

思考力・判断力・表現力等をはぐくむ「言語活動の充実」を図る授業には、下記のような要素（授業改善の視点）も大切となることが見えてきた。

- ① 知識・技能を活用する学習活動・時間の設定（単元構想の工夫・改善）
- ② ペアや少人数による話し合い
- ③ 話し合い、かわり合いを促すツール
- ④ 「思考力・判断力・表現力」の評価基準の策定

① 知識・技能を活用する学習活動・時間の設定（単元構想の工夫・改善）

学習指導要領改訂の基本的な考え方を考慮したとき、言語活動を単元レベルで設定し、見直しを持って指導にあたることも大切になってくる。

ア 授業時数増加の目的

- 基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得・定着
- 思考力・判断力・表現力等をはぐくむための、知識・技能を活用した学習活動の充実

学習指導要領の改訂により標準授業時数が増加するが、その目的は、上記のとおり、観察・実験やレポートの作成、論述などの知識・技能を活用する学習活動を充実させることにある。つまり、どのような言語活動を、どの段階で行うかを十分に検討し、実施していく必要がある。具体的には下記のような言語活動が考えられる。

① 体験から感じ取ったことを表現する

（例）・日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する

② 事実を正確に理解し伝達する

（例）・身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する

③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする

（例）・需要、供給などの概念で価格の変動をとらえて生産活動や消費活動に生かす
 ・衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する

④ 情報を分析・評価し、論述する

（例）・学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連付けるなど考えるための技法を活用し、課題を整理する
 ・文章や資料を読んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめて、A4・1枚（1000字程度）といった所与の条件の中で表現する
 ・自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり、これらを用いて分かりやすく表現したりする
 ・自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する

⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

（例）・理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改善したりする
 ・芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する

⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

（例）・予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説と検証方法を議論しながら考えを深め合う
 ・将来の予測に関する問題などにおいて、問答やディベートの形式を用いて議論を深め、より高次の解決策に至る経験をさせる

幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)(中央教育審議会 平成20年1月)

ここで注意しなければならないことは、言語活動を目的化してはいけないということである。各教科等には固有の目標があり、ねらいがある。だからこそ、各教科等で行う言語活動は、その教科等の目標達成に有効に働くものであるか、十分に吟味して選択していく必要がある。国語科以外は「言語活動」はあくまでも手段であることを再度確認し（図2）、教科の本質を見失う「教科の国語化」といった事態

に陥らないことを留意したい。

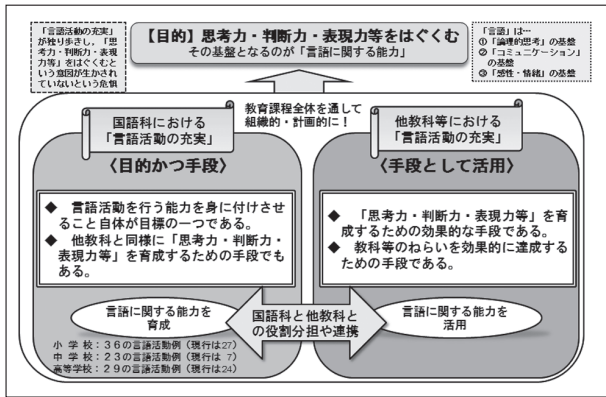


図2 「言語活動の充実」について〔概略図〕
(福島県教育委員会作成)

イ 活用力の育成を視野に入れた単元構想

一方国語科は、新学習指導要領が全教科領域で求めている思考力・判断力・表現力等をはぐくむことと、「話す」「聞く」「書く」「読む」等の言語能力の育成という二つの性格を併せもっているため、他教科等とは「言語活動」の持つ意味合いが若干異なっている。学習内容に言語活動例が示されているように、言語活動それ自体が目的であるため、それを視野に入れた単元構想が必要となってくるのである。

下記は、研究協力校における小学校第2学年国語科の学習指導計画（単元計画）である。

小学校第2学年国語科	
単元名：だいじなところに気を付けて読もう	
第一次	全文を読み、学習のめあてを持つ。 (1) 『サンゴの海の生きものたち』の初発の感想を書き、交流する。 ・ 「海の生きものずかん」を作るという単元のめあてを持つ。
第二次	「海の生きものずかん」を作るために、登場してくる生き物の特徴とかかわり合いを読み取る。 (1) イソギンチャクとクマノミの特徴を読み取り、まとめる。 (2) イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを読み取り、まとめる。 (3) ホンソメワケベラの特徴をまとめる。 (4) ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを読み取り、まとめる。 (5) 第10段落を読み、海の生き物たちのかかわり合いについてまとめ、さらに知りたいことをまとめる。

第三次 読み取ったことを活用し、「海の生きものずかんカード」を作る。

- (1) 本や図鑑を読み、紹介したい海の生き物を選び、その特徴やかかわり合いなどを見つける。
- (2) 見つけた生き物の特徴やかかわり合いなどを絵と文で「海の生きものずかんカード」としてまとめる。
- (3) 書いたカードを集めて「海の生きものずかん」を完成させ、1年生に紹介する。

この計画では、「海の生きものずかん」を作るという表現活動としての言語活動（以下、表現活動〈言語活動〉と記述）を単元終末に設定することで、次のような効果をもたらしている。

一つめは、本単元の学習を通して「海の生きものずかん」を作るということを単元初めに子どもに示すことで、本単元への関心・意欲を醸成していること（~~~~部分）。二つめは、そのことによって、教材文の読解が、単なる読解ではなく、「海の生きものずかん」に読み取った内容や表現を生かすことを意識した読解（目的的な読み）になっていることである（——部分）。最後に、読み取ったことを活用しての「海の生きものずかん」作りになるわけだが、このように目的を持って読解させることで、第二次と第三次につながりが生まれること、また、表現活動〈言語活動〉に活用してほしい内容や表現は何かを明確にした指導ができるよさが教師側にあることなども特筆できる。また、1年生へ紹介することを想定させることで、表現力を高める上で不可欠な相手意識・目的意識を持たせている点も、大変参考になる（~~~~部分）。

以上から、国語科において単元構想をする際には、次のようなキーワードが大切になってくることが見えてくる。

- ◎ 相手意識・目的意識を明確にした、表現活動〈言語活動〉の設定
- 関心・意欲の醸成
- 目的的な読み
- 指導内容・指導事項の明確化
- 教材文の読解と表現活動〈言語活動〉とのつながり

② ペアや少人数による話し合い

教育センターでは前年次研究より、「児童生徒がかかわり合う双方向性のある言語活動を位置付けること」を提唱してきている。学習内容の理解を、友だちという存在が促進するという有効性が認められているからである。

本年度研究では、それらを検証した結果、ペアや小グループによる話し合いには、教師の側から見たときに次のような機能があることが分かってきた。

- ア 全体発表へ向けて自信を付けさせる
- イ 一人一人の自己表出の機会を保障する
- ウ 他者との相違点、類似点に気付かせる
- エ 他者の考えのよさをとらえさせ、自分の考えや意見に反映させる
- オ 少数意見を掘り起こし、全体で紹介させることで授業を深める
- カ 互いに称賛し合うことで親和的な関係を築かせる
- キ 十分ではない他者の解釈や表現を補完させる

上記のような機能が有効に働くようにするためにも、ペアや小グループによる話し合いのやり方を、すべての児童生徒に身に付けさせることが大切になる。グループ学習が学び合いとして成立するように、授業者は目的と意図を持って指導にあたる必要があるのである。言語活動の一つである「伝え合い」の原点は、「対話」であることを考えると、疎かにはできない（別紙 [資料編 7] 参照）。

③ 話し合い、かかわり合いを促すツール

実践授業では、ノートやワークシート、イメージマップ（マインドマップ）、付箋紙などが話し合いやかかわり合いを促すツールとして用いられていたが、いずれも有効に働いていた。その理由は、話し合いの前に自分の考えを「書く」「まとめる」という活動を行うからであると考えられる。自分の考えを持っているため、自信を持って話すことができるのである。

そのツールの生かし方には、二つの方法が考えられる。一つは、お互いにそれらを交換し合い「読み合う」という、いわば文字言語を通しての交流、も

う一つは、そのツールを基にしながら「声に出して自分の考えや意見を伝える」、いわば音声言語による交流である。どちらが有効かは、授業のねらいや子どもたちの実態によって変わってくるが、子どもたちが生きていくこれからの社会を考えたときには、音声言語によって、しっかりと自分の意思や考えを伝えることを重視する必要がある。書いたことを相手に「ただ読ませる」、あるいは相手に対し「書いたことをただ読み上げる」のではなく、聞き手としての他者をしっかりと意識し、その相手に応じた言葉や表現で伝えたり、説明したりする力が求められているからである（別紙 [資料編 8] 参照）。

④ 「思考力・判断力・表現力」の評価規準の策定

知識・理解、技能といった「結果」は、テストや作品等から比較的容易に把握できるが、思考力や判断力等がいかに発揮されたかなど、その「過程」を把握することは簡単にはできない。しかし、「結果よりも過程」と言われるように、これからはその点の評価をこれまで以上にしっかりと行っていく必要がある。「思考力・判断力・表現力」が発揮されたかを把握するための評価規準の策定が急務なのである。

しかし、評価規準の策定には手間がかかる上、時間をかけただけの成果が思うように得られなかったという経験が、負担感や抵抗感を生んでいるのも事実である。だからこそ、これからは発想の転換を求めたい。抽象的な言葉で短文で書き表そうとするのではなく、「子どものこんな姿を見たい！」という教師の願いや思いを評価として置き換え、だれが読んでもぶれない平易な言葉で、子どもにしてほしいことや言ってほしいことなどを具体的に表すのである。どこに着目してほしいのか、何と何を関連付けて考えてほしいのかなど、思考力や判断力にかかわる子どもの学びの具体的な姿をイメージし、評価規準に反映させるのである。

評価規準が明確になれば、単元や授業のねらいにも具体性を増す。そしてはっきりとしたねらいを設定することができれば、その達成に向けての最適な授業設計が可能になり、子どもへの指導・助言もしやすくなる。つまり指導のポイントがはっきりする。

国立教育政策研究所『評価規準の作成のための参

考資料』(平成22年11月)に、評価規準の設定例が示されている。それをベースにし、抽象的な言葉を具体的な子どもの姿に置き換えることが、授業改善ひいては子どもの学力向上につながることを念頭に置きたい。説明責任を求められる時代でもある。「具体的な見える評価」で「見えない学力」を見えるようにすることが、今、求められているのである。

ここまで授業実践から見えてきた「言語活動の充実」を支える要素や「思考力・判断力・表現力等」をはぐくむ授業改善の視点などを述べてきたが、それらをまとめると以下のようなになる(図3)。「言語活動の充実」が図られた授業を展開するためにも、親和的な学級集団を築き、その母集団を支えとして、様々な授業要素を組み込むことを心がけたい。

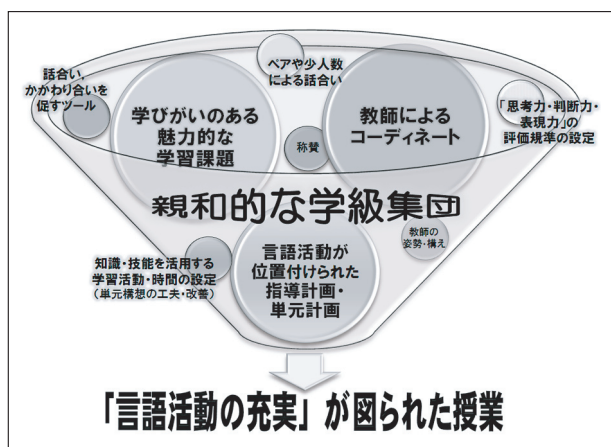


図3 単元・授業構想時の考慮事項

2 「言語活動の充実」にかかわる意識・実態調査から見えてきた有効な指導法や手立て

研究協力校の教師・児童生徒を対象に、「言語活動の充実」に関する意識・実態調査を5月と11月の2回行った。ここでは11月の調査から、主に教師が児童生徒の変容を実感できた指導法や手立てについて紹介していく。

「言語活動の充実」に関する調査概要
 実施時期 ■平成22年11月
 調査対象 ■研究協力校所属教諭・講師
 調査人数 ■168名(小学校92名, 中学校76名)

(1) 「言語活動の充実」のために、意識的に取り組んだことは何か

小・中学校とも半数以上の教師が意識的に取り組んだものに、「話し方・聞き方指導」「意見を述べたり書いたりする表現機会の充実」「ペアや少数による話し合い」「話し合いの時間の確保」の四点を挙げている(図4)。裏を返せば、そこに子どもたちの課題があるわけだが、課題解決に向けて、子どもの自己表出を促進し、表現力を高めたいという教師の強い願いが見えてくる。

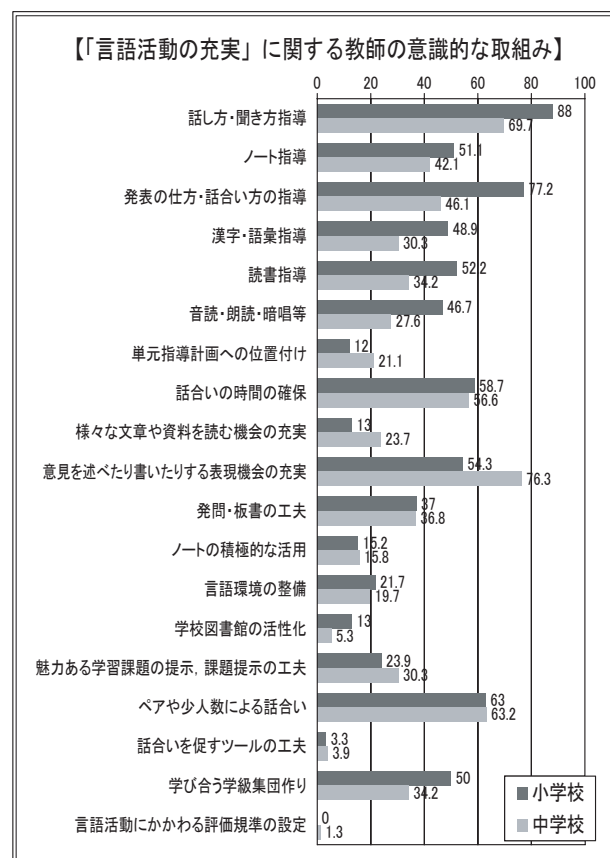


図4 教師の意識的な取組み

(2) 取組みの結果、児童生徒の学習の様子にどのような変化・変容が見られたか

回答のごく一部であるが、教師が指導あるいは手立てとして有効であると感じたものを、以下に紹介する。教師の声を総合すると、成果を得るためには「教師の課題意識」とその解決に向けた「意図的・計画的・継続的な指導」が大切であることが見えてくる。

なお、文末の()は、小学校は担当学年を、中学校は担当教科を表している。

① 話し方・聞き方指導

- 話し方・聞き方のポイントを明確にし、その都度気を付けさせてきたところ、相手を意識して、話したり、聞いたりすることができるようになってきた。(小・4年)
- 授業だけでなく生活全体を通して姿勢について指導をしてきた。聞く人は、話す人に体を向けて聞く。話す人はみんなに体を向けて話す。それが身に付いてきた児童は、積極的に話し合いに参加できるようになり、次の作業や課題への取り掛かりもスムーズにできている。(小・3年)
- 話し合いのマニュアルを示したことで、生徒は話し合いの形をイメージしやすくなった。(中・国語)

全体的な傾向として、小学校では、学習・生活態度の基盤作りとして低・中学年を中心に指導が行われ、中学校では再確認・再指導として行われている。

② 意見を述べたり書いたりする表現機会の充実

- 書くこと、話すことを毎時間取り入れることにより、自分の考えを表現することへの苦手意識が薄れ、学習意欲が高まった。(小・4年)
- 表現の仕方を、「書く」「話す」「絵で表す」など工夫して行ったことで、児童の表現方法にも広がりが見られた。(小・6年)
- ほぼ毎時間発表する場を設けているが、グループ発表では、ほぼすべての生徒が自分の考えや感じたことを話すことができている。全体発表では、毎回班の中で発表者を変えることで、生徒の発表する機会が増えた。(中・国語)
- 自分の考えを、実際に口に出して言う機会を増やした結果、今まであまり意見などを言わなかった生徒が意欲的に話し、学習に積極的に取り組むようになった。(中・保健体育)

授業で自分の考えを書いたり話したりすることを「当たり前」にしていくことが、子どもの意識を変え、主体的な学習態度の育成につながっていくことを改めて確認できる。

③ ペアや少人数による話し合い

- ペアによる話し合いを取り入れたことで一人一人の思いを伝える場が増え、発表に自信が付いたり、話し合いが活発になったりした。(小・3年)
- 子ども同士の言葉での学び合いによって、理解が深まったことが多々ある。(小・4年)
- 学習形態を変化させることで、課題解決への意欲と集中力が高まった。(小・3年)
- グループの考えを代表して全体に発表する際、あえてじゃんけんを取り入れた。発表が苦手な生徒が担当することになっても、グループで助け合いながら発表する姿が見られた。(中・数学)
- 他の意見を聞くことにより、自分の考えを再構築したり、自信を持ったりすることができ、活動に積極性が見られるようになってきた。(中・理科)
- ペアでの音声練習やスキット作成・発表を継続的に行った。どのようにセリフを言えばよいか、間はどのくらいかなどを話し合わせることで、聞き手を意識した発表ができるようになった。(中・英語)
- 人間関係や学習内容によってグループを編成し、活動に積極的に取り組めるように配慮した。その結果、参加しない生徒が減少した。(中・国語)

ペアや少人数による話し合いのよさを実感している意見が多数見られた。中でも徐々に自己表出をなくなる傾向にある中学校では、その促進と学習の深まりという点から有効性を見いだす意見が多かった。

④ 話し合いの時間の確保

- 友だちの意見に付け加えたり、補足したりしながら話すことができるようになった。みんなで考えていくという取組みをすることで、考えを話そうとする児童が増えた。(小・6年)
- 発表が途中で終わってしまっても、その続きを他の子どもが話したり、「～と考えたのかな」と気持ちをくみ取ったりするなど、学び合う姿が見られるようになってきている。(小・4年)
- 意見を言ったり発表したりすることに慣れ

させることで、以前までは発表をしたくないと思っていた生徒が自分から話すようになった。(中・国語)

- 自分の意見を述べ、友人の意見を聞き、そして考えることによって、さらに自分の理解や思考が深まっていくことを生徒が理解できるようになった。(中・国語)

学級全体での話し合いは、ペアによる話し合いとセットで行うことで効果を挙げている。全体的な傾向として少人数による話し合いを設定した授業が多いが、一人一人の自己表出の機会を保障した上で、大人数の中でも話し合いができる子どもの育成にも努めたい。

⑤ 書く活動の設定、「書くこと」の習慣化

- 自分の考えを書く活動を多く取り入れた結果、自分の考えを持って、話し合いに向かうことができるようになった。友だちの考えのよいところを取り入れて、さらによい考えにしようという意識が育ってきた。(小・2年)
- 課題について自分の考えを書く学習を充実させてきたところ、なぜそのように考えたのか、理由を付けて表現できるようになってきた。(小・5年)
- 自分の考えを書く学習や、それらを伝え合う学習を継続して行ったことで、書くことへの抵抗感が減り、白紙等の生徒が少なくなった。(中・社会)
- 実験の考察では必ず理由を書かせている。そのことにより、筋道を立てて考え、文章に表せるようになってきている。(中・理科)
- 社会科や総合の時間のレポートなどで、最初は1～2行しか書けなかった生徒が、書き始めや書く手順のヒントを与えることにより、ある程度書くことができるようになってきた。(中・社会)
- 授業の終わりに毎時間項目別の「自己評価、反省(文章記述)」を継続したことで、生徒はその反省を次の目標として、課題を見つながら取り組むことができるようになった。(中・音楽)

小学校では、話し合い活動を視野に入れて「話すために書く」ことをさせるケースが多く、中学校では、まとめの段階での「考えの整理」として書かせるケースが多いようである。授業のねらいに迫る上で効果

的なのはどちらかを見極め、バランスのとれた指導を心がけたい。

⑥ 単元構成、課題設定

- 単元の初めにめあてを提示することで、単元を通してそれを意識して学習することができていた。(小・2年)
- 目的意識を持つことで、単元全体を通して計画に沿った言語活動が行われ、読みを深め合うことができた。学んだことを生かした表現の工夫が見られるようになった。(小・4年)
- 国語科では、初発の感想をもとに、学習課題づくりに取り組んだ。その結果、課題解決に向けて意欲的に取り組む姿が見られた。課題づくりを行うことで、考える力が育ってきている。(小・6年)
- 資料等を十分に揃えた上で、様々な言語活動を各単元に位置付けて授業を行った。例えば、歴史・公民分野では、シミュレーションを行う学習課題を設定することで、考えやすくなり、自分の言葉で説明しようとする姿が見られた。(中・社会)
- 学習訓練をベースとして、生徒の興味関心を喚起する活動を増やすことで、より積極的になり、作品制作にも意欲的になった。(中・美術)

子どもの学習意欲を喚起したり、課題意識を高めたりする教師の工夫は、授業の生命線とも言えるものである。言語活動を充実させる上でも不可欠なことであり、今後も大切にしていきたい。

⑦ 称賛

- よいノートを紹介したり、発表や聞き方のよかった子どもを全体で確認したりしてきたことで、子どもたちの意識が高まった。(小・3年)
- 基本的な話し方、聞き方、発表の仕方、話し合いの仕方がよくできたときにほめることで、周りの子どもたちは具体的な方法が分かり、まねをしてみようとする姿が見られた。(小・3年)
- 友だちのよい考えや発表を称賛することで、よいところはまねしてみようとする児童が増えた。(小・3年)

「ほめることは、方向付けである」と言える。ほめ言葉には、「今の学習活動を繰り返さない」というメッセージが込められているからだ。そして、ほめられることはその子どもの自信となり、さらに活動を深めようとする原動力ともなる。

思考を深め、表現を促す。言語活動を充実したものにするためにも、称賛という機能も大切にしていきたい要素である。

Ⅳ 研究のまとめ

「言語活動の充実」という言葉には、何か「特別な学習」をしなければいけないような響きがある。しかし、それは大いなる誤解である。日々の授業の充実、すなわち「一人一人が思考し、判断し、表現する授業」であるかどうかでしかない。その視点で授業を見ていくと、「言語活動の充実」を図るためには、子どもたちが本気で学習に取り組む授業づくりを行うという、ごく当たり前のことが結論として導き出されていく。子どもの目が真剣な授業には、「言語活動」が自然と組み込まれているからである。

「学び」の主体は、子どもにある。その子どもが授業で輝く具体的な姿を求めれば、おのずと「言語活動」が入り込んでくる。主体的に学ぶ子どもの姿を求めて、教師は何をすべきなのか。どのように単元を構想し、授業を構成するのか。そして子どもたちとどう向き合っていくのかを考えることこそ、「言語活動の充実」への近道なのである。授業とは何か。学ぶとは何か。主体的な学びとは何か。「言語活動の充実」は、教育の本質を、我々教師一人一人に問うているのである。

1 研究の成果

- (1) 「言語活動の充実」が図られた授業は、「言語活動が位置付けられた指導計画・単元計画」「学びがいのある魅力的な学習課題」「教師によるコーディネート」「親和的な学級集団」の四大要素によって支えられていることが明らかになった。
- (2) 「言語活動の充実」は、日々の授業の充実、すなわち一人一人が思考し、判断し、表現する授業の積み重ねであることが確認できた。
- (3) 研究協力校の授業実践をもとに、「言語活動の

充実の日常化」を図る上で必要な授業要素（授業改善の視点）を具体的に提案することができた。

2 今後の課題

- (1) 本年度提案した「言語活動の充実の日常化」を図る上で必要な手立てや授業の要素（授業改善の視点）を、教育センターでの研修や広報誌・Web等への掲載を通して広く県内に普及していきたい。
- (2) 授業を支える教育環境の形成として、言語環境の整備や学校図書館の有効活用等「学校生活全体における言語活動の充実」についても研究を深めていく必要がある。

〈参考・引用文献〉

- 1) 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）
（中央教育審議会 2008年）
- 2) 授業を豊かにする28の知恵 白井達夫著
（三省堂 2010年）
- 3) 思考力を育てる 人間教育研究協議会編
（金子書房 2007年）
- 4) 生きてはたらくことばの力を育てるカリキュラムの創造 神奈川県川崎市立中原小学校編
（三省堂 2009年）
- 5) 各教科等における「言語活動の充実」とは何か 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編
（三省堂 2009年）
- 6) 活用する力を育むパフォーマンス評価 香川大学教育学部附属高松小学校著
（明治図書 2010年）
- 7) 国語授業をゆさぶる—発問と思考— 石田佐久馬著
（東洋館出版社 1990年）
- 8) 効果10倍の〈教える〉技術 吉田新一郎著
（PHP新書 2006年）
- 9) 「言語活動の充実」とは何か 高木まさき
（教職研修5月号 教育開発研究所 2010年）
- 10) 主体的な学習態度を育成する授業改善 粕谷貴志
（教育時評No.21 学校教育研究所 2010年）
- 11) ジャストスクールWeb
（<http://www.justsystems.com/jp/school/academy/hint/rubric/>）

授業改善 10 POINTS

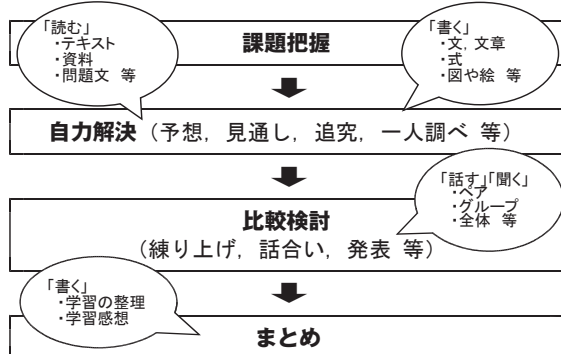
「言語活動の充実」のために — 「思考力・判断力・表現力等」の育成をめざして—

「言語活動の充実」が図られた授業を構成する際の留意点を、各項目ごとにまとめました。本編と併せて、授業改善の際の参考にしてください。

1 言語活動が位置付けられた指導計画・単元計画

各段階で、しっかりと「言語活動」を位置付けましょう！

一人一人の思考力・判断力・表現力等が働く「対話」や「書く」活動等が位置付けられた授業や単元を構成しましょう。考える力は考えることでしか、表現する力は表現することでしかはぐくまれません。そのための時間の確保からまず始めましょう。



- ◇ 一人一人に、自分の考えや意見をまず持たせることが肝要です。そのための手立てをいかに講じるかは、教師の大切な役割の一つです。
- ◇ その手立ての一つに「ヒントカード」の活用がありますが、それを日常化するには労力がいらします。日常化できる無理のない手立てとして「友だちとの学び合い・教え合い」も視点の一つです。
- ◇ 自力解決だからといって、個人を「孤独」にしてはいけないでしょう。強い個人ばかりではないことを踏まえ、様々な子どもが集う学校という特性を生かした手立てを講じていきましょう。

2 学びがいのある魅力的な学習課題 ① (めあての文末表現)

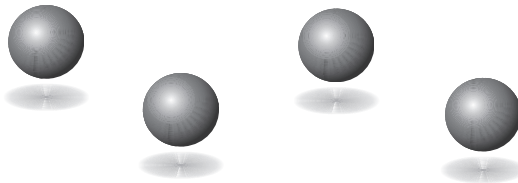
「子どもが動き出す授業」に向けて、めあての文頭や文末を変えてみましょう！

子どもが「自ら考え、自ら語り出す」ような授業＝子どもが動き出す授業をめざして、めあての文頭や文末を変えるという、小さなことから始めてみてはいかがでしょうか。

「～について考えよう」「～をまとめよう」「～を読みましょう」「～しよう」

「なぜ～なのだろう?」「～だろうか?」「どうすれば～」「Aか? Bか?」

- ◇ [] と [] とでは、子どもがわくわくする課題はどちらでしょう? 子どもが考える「必要感」を持つのは、どちらでしょう?
- ◇ [] の言葉を投げかけているのはだれでしょう? これらの言葉では、いつまでも「やらされている感」から抜け出せません。
- ◇ 子どもの疑問や思いを高め、その結果として子どもの内面から出される [] のような言葉をめあてにすることで、子どもたちは学ぶ目的・学ぶ必要感を持てるようになるのです。



3 学びがいのある魅力的な学習課題 ② (ズレを生かす)

多様な意見や考えを導き出すために「ズレ」を大切にしましょう！

話し合う必要感を生み出すためには、多様性の生まれる学習課題であることが前提になります。では、そんな学習課題をつくるには、どうすればよいでしょう。その一つの視点として、「ズレ」というものが考えられます。

- 「イメージ」とのズレ ○ 「感覚」とのズレ ○ 「生活経験」とのズレ ○ 「既習内容」とのズレ
○ 「予想」とのズレ ○ 「友だち」とのズレ 等

- ◇ 「ズレ」という言葉は、一般的にはよいイメージはありませんが、「ズレ」を追究していくことで感性や認識を深めることができると考えられます。
- ◇ 「ズレ」を明確にした上で、それを中心に話し合わせるとよいでしょう。相違点を明らかにし、それぞれにその根拠を説明させ、正しいか否かを検討し合うのです。ズレを修正しようと、あるいはそのズレの基を探ろうと、話し合いは進んでいきます。このような学習の積み重ねが、子どもに論理的な思考力をはぐくんでいきます。
- ◇ 「ズレ」に気付くということは、一人一人感じ方や考え方は違うのだということに気付くことにつながります。「他者理解」の原点と言えるでしょう。だからこそ、一人一人の違いを大切にしたいものです。

4 教師によるコーディネート ① (考えや意見の共有)

「分かりましたか?」「分かりません!」 と言える学級にしましょう!

自分の解法を説明し、最後に「分かりましたか?」と全体にたずねる。そして、問いかけられた子どもたちは、元気に「はい!」と答える。小学校の算数科でよく見られる風景です。「いいですか?」「いいです!」というかけ合いもよく見られます。はたしてこの雰囲気の中で、子どもは「分かりません」と言えるでしょうか?

- 子どもが声を揃えて言う「分かりました!」「いいです!」は、理解が十分ではない子どもや少数意見の子どもを放置する行為である。

- ◇ 勇気を持って「分かりません」と言える子どもなら心配ありません。どこでも通用するでしょう。しかし、大部分の子どもは、分からなくても「分からない」とは言い出せません。
- ◇ だからこそ、授業のポイントとなるべき大切なときに「分かりましたか?」「いいですか?」と問うのはやめにしたいたいです。分からない子どもや、よくないと思っている少数意見を持つ子どもが埋没してしまいます。
- ◇ その問いかけをやめた上で「分からないことを分からないと言える」学級を作ることを心がけましょう。一人だけ意見が違って、その子の思いを大切にあげられる学級をめざしましょう。

「言語活動」を授業の柱にしようとするとき、おとなしく静かに授業を受けることをよしとする授業「観」も変えていく必要があるでしょう。学習規律を守ることが前提にして、疑問に思ったことや意見があるときには、自由に発言できる学級の雰囲気を作っておくことが大切になるでしょう。



5 教師によるコーディネート ② (的確な発問による高まり合い)

思考を働かせる発問とは!?

発問を一般化することは、極めて難しい作業です。授業のねらいや教材の持つ価値、児童生徒の実態がそれぞれに違うからです。できるだけ多くの発問を用意し、その中からねらいや児童生徒の実態に応じた発問を精選していくしかありません。教師による教材研究と児童生徒の実態把握によるところが大きいと言えるでしょう。

- <思考力を働かせるための発問>
- 選択したり判断したりすることを求める発問
 - 二つの関係を把握したり比較したりすることを求める発問
 - 原因と結果を探ったり、分析・要約したり、説明したりすることを求める発問
 - 人物の性格や人柄、心の中の動き、場面の情景などを思い描く発問 等

6 親和的な学級集団

授業の中で、「ルール」と 「リレーション」をはぐくみましょう!

学級集団に、みんなが気持ちよく生活するための決まり(ルール)が共有され、温かい人間関係(リレーション)が形成されていること——。良好な学級集団、そして「学び合う学級集団」の育成は、授業を通して行えます。

① 授業の中で、「ルール」を育てる

【一斉授業でみんなが気持ちよく学ぶための学習規律】

- 時間の遵守 ○ 発言の仕方 ○ 聞く態度
- グループ活動の際の決まり ○ 学習準備 等

② 授業の中で、集団に「リレーション」を育てる

- お互いにかかわり合いながら、協力して活動する場面の設定
- 活動や発言のよさをお互いに認め合ったり称賛し合ったりする機会の設定
- 学習内容を教え合ったり相談し合ったりする活動の設定

- ◇ 「学習意欲や学力」と「学級生活への適応」「所属する学級集団との関係性」には、大きな関連があります。学級への適応状態が良好であれば、一人一人の学習意欲は向上し、所属する学級集団が親和的な関係性を有していれば、学級全体として学習意欲が向上します。学力検査の結果においても、オーバー・アチバーの割合が高くなることから、調査結果として明らかになっています。
- ◇ 上記の点を踏まえると、「日常の授業の中で、児童生徒の適応援助や学級集団の育成を図る」ことも、授業改善の大切な視点となりそうです。

7 ペアや少人数による話し合い

「グループ学習」を機能させるモデルを示しましょう!

「グループで話し合ひましょう」。この一言で子どもたちが話し合ひを始められるようにするためには、経験と視点が必要です。

- 何を話し合うのか? (話題)
- どのように話し合えばよいのか? (方法)
- 相手の話の何に注目するのか? (視点)
- 話し合ひの結果、自分はどうなるといいのか? (話し合ひ後の姿、着地点)

- ◇ グループ学習に入る前に、実際にやりとりを見せることも有効な手段です。教師がある子どもと共に、教師がイニシアティブを取る形で話し合ひを進め、イメージを持たせるのです。その後、二人は「どのようにして、何を話し、何を聞き取ったか」を全体で振り返り、話し合ひのイメージを共有します。
- ◇ このような経験の積み重ねが、主体的な話し合ひ、学び合ひへとつながっていきます。
- ◇ グループ学習を成立させる人数は4人が最適です。

8 話し、かかわり合いを促すツール

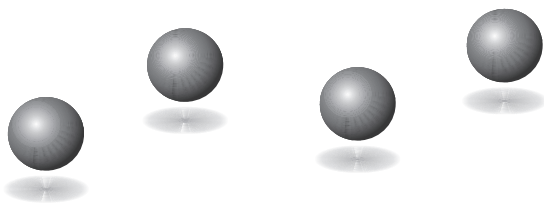
学力定着には「伝える」言語活動を！

「言語活動の充実」と学力向上には関連性があることを本研究では昨年度明らかにしましたが、それを裏付けるように、言語活動を含めた人間の行為と定着の度合いを数字で表したアメリカの研究者がいます。

行為	定着率	行為	定着率	行為	定着率
聞く	10%	見る	15%	聞いて見る	20%
話合う	40%	体験する	80%	教える	90%

『効果10倍の<教える>技術』(PHP新書)より

- ◇ 聞くだけでは子どもたちは10%しか定着しませんが、体験を交えたり、伝達したりすることを行わせると、それが80%以上に上昇します。
- ◇ ですから、教師が一方的に教えるだけでなく、子ども同士で教え合う活動を入れることが大切になってくるのです。また、「教える」に相当するものとして、「報告する」「説明する」「発表する」といった言語活動を授業や単元に組み込むことも大切になるでしょう。
- ◇ 子どもが自分の考えや学んだことをアウトプットする「伝える」言語活動を、ぜひ授業に取り入れましょう。



9 大切にしたい教師の構え・姿勢

子どもの言葉をはぐくむために 時には子どもに言葉を預ける勇気を持ちましょう！

子どもが自分の考えなどを発表した後、教師はどのような対応をとっているでしょう。教師の言葉に「翻訳」し、全体に伝え直すという行為をしてはいないでしょうか。これでは子どもの言葉は磨かれません。それは子どもから言葉を奪っていることと等しい行為です。

子どもの発表が分かりにくいときには…

- 「えっ!? どういうこと? もう一度言ってみて」と、再度本人に説明させる。
- 「〇〇さんが言おうとしたこと分かった?」と、他の子どもたちに説明させる。

- ◇ 教師は説明することが好きです。そして、自分の言葉、つまり教師の言葉が一番分かりやすいと思いついてしまっています。しかし、教師よりも友だちの言葉の方が通じる場合もあることを忘れてはならないでしょう。
- ◇ 自分の考えを自分の言葉でなんとか伝えようとする子どもや、友だちの発言を、その思いに寄り添いながら言い換えられるような子どもを育てるためにも、言葉を子どもに預ける勇気を持ちましょう。

10 国語科と他教科との関連

教科特有の用語や表現は、 各教科等で適切に指導を！

社会科や理科の学習をしていると、「資料の文章が読めない(理解できない)」「相手に伝わるように説明できない」子どもが必ず出てきます。すると、「国語の力が付いていない」と思ってしまうのですが…パソコン関連の本を読んでいて、「何が書いてあるか分からない」という経験をしたことはないでしょうか。それと同じなのです。「読めない」「説明できない」理由は、国語力だけにあるのではなく、各教科特有の「用語や表現」が身に付いていないことにも起因しているのです。

【物質の種類と抵抗のちがいが】

電熱線の材料として用いられているニクロムの抵抗は、他の金属に比べると大きい。これに対して、導線の材料として用いられる銅は、抵抗が非常に小さいので、回路ではほぼ、0(ゼロ)とみなしてよい。その他の金属も、いっばんに電流を通しやすく、これらは導体(どうたい)とよばれる。一方、ガラスやゴムなどの物質は、抵抗が非常に大きく、電流がほとんど流れないので、不導体(ふどうたい)または絶縁体とよばれる。

『新しい科学1分野上』(東京書籍)より

- ◇ 上記の文章中にある、「抵抗」「導線」「回路」「導体」「不導体」「絶縁体」などの用語の意味は、国語科の指導の範囲ではなく、各教科等で適切に責任を持って指導する必要があるものです。この指導を各教科で十分に行わないと、レポートや論述などの「言語活動」に支障が出てしまいます。
- ◇ しかし、文章を読む上で必要な言語能力は、国語科で責任を持って指導する必要があります。例えば上記の「これに対して」「これら」「一方」「または」といった接続語や、「不」という文字の働きなどです。文章読解の基礎的・基本的な力や語彙を推測する力などは、国語科で確実に付けていきましょう。

中1の国語科「書くこと」領域の言語活動例には、次のような他教科に関連する内容があります。

- ア 関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと。
- イ 図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。
- ウ 行事等の案内や報告をする文章を書くこと。

アは「音楽科」「美術科」の鑑賞に、イは「社会科」「理科」のまとめる学習活動に、ウは「総合的な学習の時間」に、それぞれ関連します。

- ◇ 国語科は、子どもたちが他教科等に活用できるように意識して指導する、また、子どもたち自身にも意識させて取り組ませることが大切になります。また、各教科等と連携して取り組む必要もあるでしょう。